くるめの文化財

平成11年３月
第１５号
東久留米市教育委員会

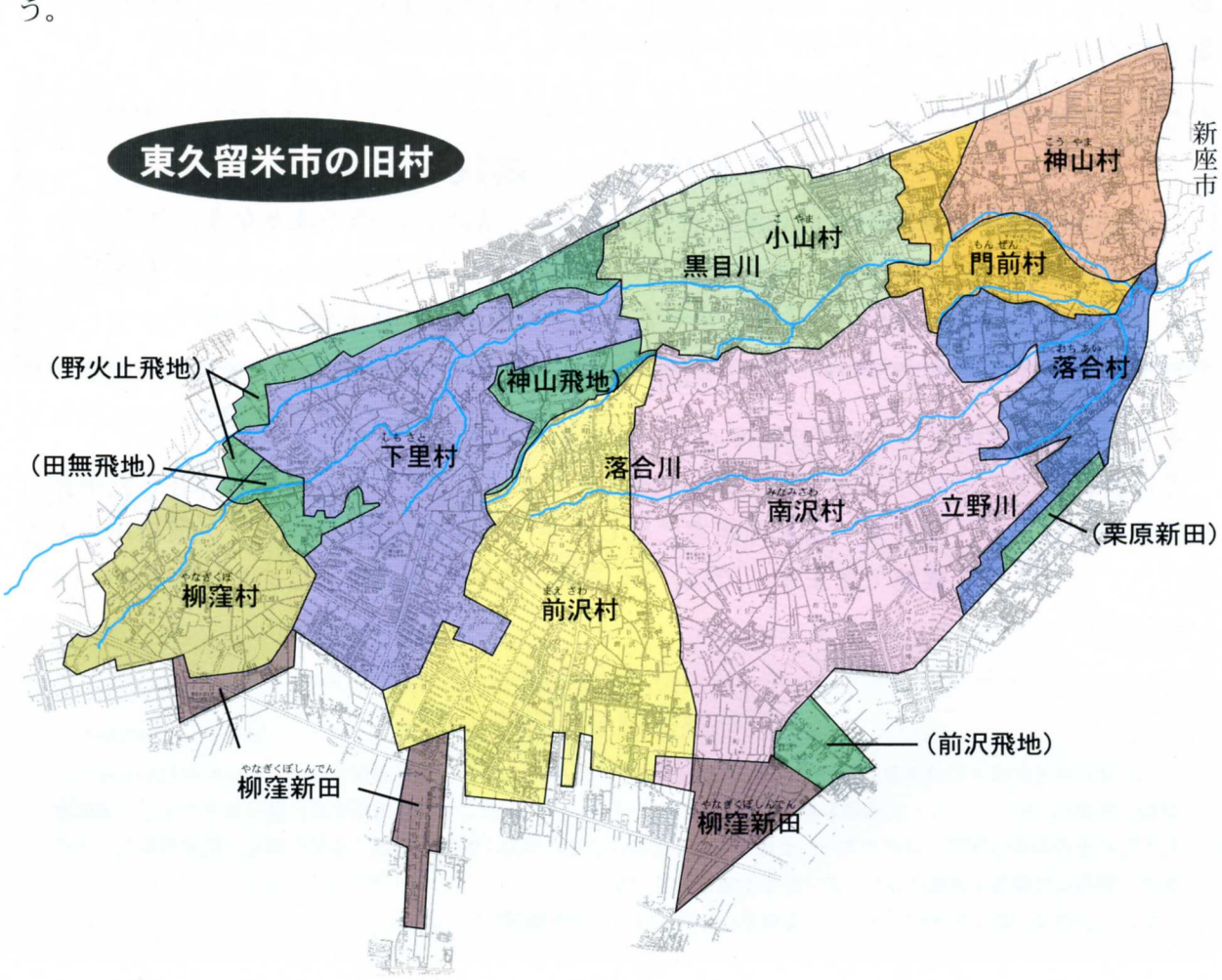
東久留米　－地名の由来－

“東久留米”という土地は、もともとひとつの行政単位として存在していたのではなく、小さな村々が集まって明治時代にほぼ現在のような姿になりました。

東久留米市に先立つ久留米村が誕生したのは、明治２２年です。明治政府が町村合併を図って市町村制を施行した翌年、江戸期の８か村と２つの新田に田無の飛地を含めて久留米村が成立しました。（下図参照）

当時、東久留米市域は神奈川県北多摩郡に属していましたが、明治２６年に東京府に編入され、昭和３１年には人口が１万人に達して久留米町となり、昭和４５年、東久留米市が誕生します。この時、久留米の頭に「東」がついたのは、自治省から福岡県久留米市との混同を避けるよう要望されたことや、町民からも“東久留米”を希望する声があったことによるようです。因みに、大正４年に武蔵野鉄道（現西武池袋線）の池袋～飯能間が開通した時すでに、同じ理由により、駅名は「東久留米駅」として開業しています。

では、“久留米”という地名はどこから来たのでしょうか。今回はその由来を探ってみましょう。



久留目・黒目・来目

“くるめ”という呼称は、古くは江戸時代の資料に登場します。

徳川幕府が編纂した『新編武蔵風土記稿』（以下『風土記』）には、東久留米市域の地理が初めて記されており、この中に“くるめ”が見られます。その当て字は「久留目」ですが、村の名前ではなく川の名前として記されています。

『風土記』を見てみましょう。（引用文中の下線は引用者。以下同）

> 多磨郡之三十四　野方領
>
> ○柳窪村　柳窪村は、郡の北にあり、村名の因て起る所をしらず、……
>
> 山川　久留目川　小名皀莢久保より湧出し、村の北の方を流れ下里村に至る、村内をふること六町許、川幅凡六町※……
>
> ○落合（オチアヒ）村　落合村は、郡の北にあり、片山郷新倉庄など、いへり、……村名の由て起る所を尋るに、西の方前澤村より湧出る流二條あり、村内にて久留目川と合し一條となり、此三流落合を以てかく名付と云り、……
>
> ※雄山閣版（第三期刊行）の表記のまま。

柳窪村の皀莢窪（さいかちくぼ）から湧出し、下里村、小山村、門前村、神山村を経て落合村に流れ込む「久留目川」は、落合村で他の二つの川と合流し、新座郡（現新座市）に入ると「黒目川」と表記されるようになります。

> 新座郡之一　總説
>
> 黒目川　水上は多磨郡柳窪村にて、所々の清水あつまり、二條の流となり、同郡落合村に至りて合して一流となれり、本郡栗原村　ながれいる、此邊をすべて黒目里と云、故に此名あり、或は久留目川とも書き、又來目川とも記す、…

そして、新座郡栗原村より下流はすべて「黒目川」で統一されています。

この資料では、落合村の合流地点より上流において“くるめ”という村が存在した形跡は見当たりませんが、現在東久留米の西端に発して東へと横切る黒目川が、「久留目川」とも呼ばれていたことは確認できます。では、“くるめ”という地名は、この川の呼称からきているのでしょうか。

『新編武蔵風土記稿』

江戸幕府が大学頭林衡の建議によって編纂した武蔵国の地誌。昌平坂学問所に地理局を置き、文化七年（1810年）に起稿、文政十一年（1828年）に脱稿した。巻数は二百六十五巻に及ぶ。郡ごとに分担を定め、延べ四十余人が編纂に当たった。その内容は正確・詳細であり、武蔵国内の地理及び歴史的事項、神社の由緒、仏閣の縁起、旧家の事歴、古文書等を網羅した貴重な文献として、古くから珍重されている。

今回の引用は、雄山閣発行『大日本地誌体系』（昭和45年、第三期刊行）による。

黒目の里

ここで気になるのは、上記の「新座郡之一」で「此邊をすべて黒目里と云」という部分です。新座郡には黒目里と呼ばれる土地があったのでしょうか。

再び『風土記』を見てみましょう。

新座郡之二　野方領

〇堀之内村　堀之内村は、石神村の東にあたれり、此村も郷名の唱を失すと云説あれども、片山郷に屬すべきか枝郷栗原村は現に片山郷なれば、此村も片山に屬すべき一證とも云べし、又土人の説に此邊を黒目里と號すと云へり、……

〇堀之内村枝郷　栗原村　栗原村は、堀之内村の枝郷なれど、元祿十五年改め【武藏國圖】及びその頃の郷帳にも、現にして載せたれば古き村なる事は論なし、その地は廣澤庄に屬し、黒目の里と稱す、……

黒目川は、堀之内村、栗原村のほか、同郡の十二天村、辻村等にも流れ込んでいますが、これらの村にも黒目里という里名がみられ、黒目川がその名の由来であろうということが書かれています。新座郡では、土地の人々が古くから黒目川流域を「黒目の里」と呼んでいたのは確かなようです。

では、「黒目の里」とは合流地点より下流の地域のみを指すのでしょうか。上記の堀之内村の項に「片山郷」という郷名が見られますが、古くは一村だけであった片山村が、「後その村をわかちて十村となせり、此餘多磨郡の内落合村及び同村の新田とを合て十二村此郷に屬す」という記述が「新座郡之一」にあります。

律令制下においても東久留米市域は多摩郡に属したと推定されますが、隣接の新座郡との間には目立った自然的境界もなく、この周辺の村々は上記のように新座郡片山郷に属すことがあったり、その境界は土地の人々にとっては漠然としたものであったと思われます。「黒目の里」が、黒目川の流れる落合村や神山村、門前村地域をも含めた黒目川流域を指す呼称だったという推察もできないことはありません。

しかし、多摩郡に「黒目の里」という里名は全く見られず、「黒目の里」はあくまで合流地点より下流の新座郡の中にしか姿を現わしません。これは、川名の表記が合流地点を境に「久留目川」から「黒目川」に変化していることと併せて、今後研究すべき課題です。

参考　福岡県久留米市の地名の由来　－『久留米市史』より

①「応神紀」・「雄略紀」などから、縫織に携わる渡来人との関連を説くものが多い。例えば、呉媛（くれひめ）－呉女（くれめ）……また、久留倍木（くるべき）－車木（くるまぎ）は、糸車からの発想で紡績につながる。その他、②太古先住のアイヌ族を天孫族が放逐したが、侵入者をクルミ（日本の男子の意）と呼んだアイヌ語がクルメになまった。③太古、神武天皇の家臣大久米命（おおくめのみこと）の領地であり、命の目が大きくクルクルしていたから。④用明天皇の皇子来目皇子（くめのみこ）に由来する。⑤車持部（くるまもちべ）説。⑥河川蛇行を意味するクルメク（転く）を語源とする自然地名説。⑦天慶七年（944年）の神名帳三潴（みずま）郡の条に玖留見神を祭祀したとあることから。

来　　梅

市内柳窪の天神社には、安政四年（１８５７年）に建てられた「梅林の碑」があります。境内の松の古木が朽ちるのを惜しんでその傍らに梅の木を植え、その由来を記した碑です。

柳窪里ノ梅林之記

武蔵ノ国多磨ノ郡来梅ノ荘の里の産神に北野ノ大神稲荷子ノ聖てふ三柱を斎祀れる旧祠あり其もとの故よしハ今詳かならねど宮居のもとより湧出る清水ありて霖にも増えす旱にも涸れず末ハあまたの邨里に灌きて千しろの田ノ面をやしなへりそをやがて来梅川としも唱なるハ彼飛梅の故事に由縁あるにやその祠の傍に天神の松と称へし古木ありき……

武蔵国多摩郡来梅ノ荘の里に、鎮守の神として三柱を祀った社がある。その由来は定かではないが、そこから湧出した清水が多くの村々に流れ込み、田をうるおしている。これを来梅川と呼ぶのは、天神（菅原道真）の飛梅の故事に由縁があるのだろうかという内容ですが、この碑文は、武蔵府中の六所宮神主猿渡盛章（１７９０～１８６３年）によるものです。梅の移植と“くるめ”を組み合わせて「来梅」、黒目川が「来梅川」と記されていることから、この天神社の梅を“くるめ”の地名の由来とする説もあります。

△梅林の碑（市指定文化財）
柳窪四丁目１５　天神社境内

いずれにしても、自然地名としての“くるめ（くろめ）川”が古くから土地の人々によって語り継がれ、後に“くるめ”という村あるいは集落の呼称にもなったと考えるのが自然ではないでしょうか。

『古代地名語源辞典』（東京堂出版）には、「『小平地』をクルメと呼ぶとする説、『川や山腹のぐるぐる曲がった（＝クルメキ）ところ』との説（鏡味完二）もある。地形地名としては、……クルメキ説が各地の地名と地形に一番合致する。」と書かれています。まさに、湧水と川の豊富な東久留米にぴったりの名前ではないでしょうか。

「久留米」の文字は、明治政府が編纂した『皇国地誌』の中に初めて現われますが、ここでも土地や集落の名称ではなく、「久留米川」という川の名称として掲げられています。「目」が「米」に変わったのは、米の収穫が少なかったこの土地に、米が久しく留まってほしいという願いがこめられているからとする説もありますが、その真偽は定かではありません。

【編集・発行】
東久留米市教育委員会社会教育課
〒203-8555　東京都東久留米市本町３－３－１
電話　０４２４（７０）７７７７
内線３２１３～４